



新中学校にも坂中の伝統を

第13代校長 成川 嘉 則

平成4年4月、坂中丸の舵取りとして着任、「はたして、坂中丸の船長が務まるだろうか」身の引き締まる思いであった。坂中教育の充実・発展のために、何ができるのか。教職員・生徒・保護者・地域に具体的方針を示すことが求められた。

着任の折、最初に心に浮かんだのが第6代湯浅藤吉校長の言葉であった。坂中教頭時代、ある酒席で曰く「成川君よ坂中は那賀郡時代から、勉学にせよ運動にせよ鍛えあげれば傑物のよくでる学校だよ」「目標意識を高くもって根気強く鍛えることが大事だよ」との熱弁が印象深く残っていた。坂中の校門に日本一を示す標柱が3本も建っていることから、その言葉が頷ける。

生徒一人ひとりの個性を見極め、鍛え上げることは教育の重要な原点であることに異論はないが、当時の教育の流れの中に、学歴偏重社会の影響を受けて偏差値重視の教育、輪切り教育が横行。学習内容の理解できない生徒は、出番・居場所がなく、不登校・校内暴力等生徒指導上の問題が多発、荒れる学校が多くでた。やがて、全国的に教育の在り方を根本から見直す取り組みが始まり、坂中においても知育偏重の教育を是正する取り組みが行われた。そのことは、50周年記念誌に掲載させていただいた。昭和40・50年代には、文部省指定生徒指導研究発表会、同指定同和教育研究発表会、NHK全国合唱コンクールでの活躍。昭和60・平成代には、県指定環境教育推進事業、コンピューター室新設に伴う情報教育の充実、毎年実施を重ねた人権コンサート、生徒会活動の活性化等多くの生徒の出番や居場所づくりができたものと確信する。

中学校教育において、生徒・保護者が最も願っていることは、希望する進路の実現である。そのため、わかる授業の実践は最重要課題であり、学力をしっかりとつけさせることが求められている。希望進路の実現に向けて、主体的・意欲的学習ができるよう、学校経営の中核に位置づけ、広い人格教育の基盤に立って進められるべきと考える。

校長在任6年間、特色ある取り組みとして、平成4年度堀内佳氏より始まった人権コンサートは6回を重ねた。知識の面と感性に訴える指導を統一しながら鋭い人権感覚が一層深められたと考える。一年生の夏休み、2泊3日の宿泊訓練を実施、自然体験学習として3時間以上にわたる沢のぼり体験に挑戦した。部活動と異なる困難体験ができたと考える。また、50周年記念事業の一つとしての中国阜安（フーアン）中学校との交流で、校長、生徒2名を迎え、生徒会と活発な意見交換ができたことは、国際化が進む中意義深い交流であったと考える。

この度、予想もしなかった閉校記念誌の原稿依頼を受け、校長時代の雑感を書かせていただきましたが、新中学校にも坂中の伝統を是非、生かしてほしいと願っています。